

# HORIBA'S WORLD

Vol. **5**  
2001

株主通信



半導体からヘルスケアまで、分析新世紀

**HORIBA**



堀場の事業をご理解いただくために

## ベンチャー精神で 競争力を強化。

代表取締役社長

堀場 厚

堀場 厚 略歴

1948年生まれ、京都出身  
1971年甲南大学理学部卒業  
同年堀場製作所入社、米国子会社に出向  
1975年にカリフォルニア大学工学部卒業  
1977年に同大学院修了  
1992年に取締役社長に就任

Q2 半導体という浮き沈みの激しいマーケットという印象があります。果たして今後も安定した収益が持続できるのでしょうか。

Q1 中間期決算を振り返り、業績をどのように評価されていますか。

単独ベースで増収増益を、連結ベースでもそれを上回る成績を上げることができたことに満足しています。ただ、当社の主力事業である「エンジン計測システム機器」や「分析システム機器」が今ひとつパワーアップしていません。今後の巻き返しのためにも営業力の更なる強化を図っていきます。中間期は主力事業の伸び不足を、「医用システム機器」や「半導体システム機器」が補った形ですが、なかでも半導体部門がけん引力となりました。

半導体分野における当社のシェアは幸か不幸かまだまだ低い状況です。子会社エステックのマスフローコントローラのように市場の4割を押さえているところでは、シリコンサイクルが落ちると、それにリンクして売上也落ちる心配はありますが、HORIBA本体やジョバンイボン社（フランスの分光器のトップメーカー、97年に買収）が取り組んでいる半導体後工程の分野はまだまだシェアが小さく、シリコンサイクルの影響はほとんどありません。海の上が荒波でも海の中に入ると静かなようなものでしょう。シリコンサイクルのアップダウンに関わりなく、必ず伸ばしていけると考えています。

Q 3 次世代技術を見越した対応策はとられているのでしょうか。

半導体ウエハは300ミリ対応が主体になっていくわけですが、その製造工程では製品の歩留まりを確保するため、精度の高い分析機器が必要となっています。先端ユーザー企業との共同開発をベースに順次新製品を投入します。また、半導体の環境モニターであるFT-IR という赤外線を使ったガス分析機がありますが、発売からわずか半年で多くの引き合いをいただいている状況です。

Q 4 既存ビジネスと半導体事業の連携はどのようになっていますか。

既存市場でのHORIBA ブランドの意義は大きく、たとえば韓国には世界でも有数の半導体メーカーがありますが、私どもとの取引はようやく始まったばかりです。しかし、各半導体メーカーのグループ会社である自動車や造船・家電には古くから分析機器やエンジン計測機器を納めており、信頼と実績は十分伝わっています。こうした相乗効果が発揮できれば、半導体関連機器にも大きな飛躍のチャンスが生まれると確信しています。半導体分野の情報収集に関していえば、私自身、半導体の世界的な業界団体SEMI の役員にも選ばれています。業界の中核団体での活動を通して最先端の技術情報が入り信用も高く、市場の動きも最も早く察知できるという優れた利点があります。

Q 5 半導体と医用分野の好調は、これまで取り組まれてきたグローバル連結経営の成果の現れでしょうか。

子会社である医用システム機器のABX 社（フランスの医療用血球計数装置メーカー、96年に買収）やジョバンイボン社の業績は好調に増収に推移しています。M&A 戦略の成果がようやく出てきたといえるでしょう。海外の有力企業をグループの一員に迎えることで、当社の知名度は欧米でも確実に向上し、ビジネスにも貢献しました。21 世紀にHORIBA が勝ち残っていくには、グローバルな事業展開を積極的に進めていかなければならない、というのが、私どもの未来に向けた回答だけに、この道をまっしぐらに進んでいきたいと考えています。今のままでも各子会社は年間100億円や120億円の売上は堅調に維持していけるでしょうが、大きく伸ばすには強い競合メーカーとのグローバルレベルのアライアンスも不可避です。

Q 6 経営効率化を目指す業務改革プロジェクトにも取り組んでおられますね。

海外ビジネスが拡大しますと、本社との情報の共有化をはじめマネジメントの迅速な意思決定が求められます。社員の意識改革を目指す「ブラックジャックプロジェクト」は、IT（情報技術）投資による情報系ハードの整備と両輪をなすものです。また、ITの深化により、e-ビジネスも避けて通れないものとなっています。当社は、研究開発費の半分ほどに相当する資金をIT関連に投入していますが、一人ひとりが適確に使いこなすことになれば、この投資は必ず生きてきます。ITの活用によってB to B（企業間電子商取引）が進むだけでなく、資材の調達面でもコストセーブが着実に進んでいます。ITへの先行投資が、当面の業績の足かせになっている部分はありませんが、数年後には大き

な花を咲かせると確信しています。

Q 7 今後の中長期的経営戦略についてお聞かせください。

成長には、「エンジン計測システム機器」「分析システム機器」の高シェア維持と、「半導体システム機器」「医用システム機器」のシェア拡大が欠かせません。かつて自動車を開発することは新しいエンジンの開発を意味し、分析法にも新技術が求められました。その需要拡大により、エンジン計測システム機器や分析システム機器の事業を順調に成長させることができたわけです。しかし、製品単独の受注に限界が見えてきた今後は、新世代のエネルギー体系を見越した燃料電池をはじめ開発段階からのシステム提案と分析をトータルに請け負っていただける力が求められています。

Q 8 自動車メーカーなどの世界的な再編にどのように対応されますか。

グローバルネットワークで対応できる企業はいまやHORIBA しかないわけですから、そのメリットを生かしてこそ競争力の強化につながります。これまではアメリカや欧州など個々でローカリゼーションの思想をベースに対応してきたわけですが、自動車メーカーの世界的な連衡合従に連動した戦略や商品の標準化を図るとともに、メーカー群にワンパッケージで対応できるようにと考えています。そうした動きにより積極的に対応するため、潜在的な成長性が高いアジア、なかでも中国、韓国、そしてシンガポールに新しい拠点網を整備しています。分析部門では、「半導

体・エレクトロニクス」「エネルギー」「環境」「バイオ」という4つの成長市場に絞り込みつつあります。競争力を確保していくには集中と選択が必要だと考えているからです。また、ある分野における先進的な企業あるいはグループと共同で製品開発を行うことで、デファクトスタンダードとなる製品を供給する方針です。



Q 9 株主の皆様メッセージをお聞かせください。

現在の株価（1月10日現在830円）については決して満足していません。将来のわれわれの方向性というものを、もっと明確にわかりやすく示す必要があると考えています。HORIBA が取り扱う製品の多くは専門的でプロ向けです。民生品ですと、積極的な宣伝効果により拡販させるという方法もあるかもしれませんが、しかし、私どもはあくまでも専門家としての目を持った、本物の市場で勝負したいわけです。たとえば、半導体では微細化やマイクロ化といわれる技術がありますが、全く妥協の許されない先端技術の世界です。HORIBA の技術志向とベンチャー魂がこうした市場で高い評価を得る可能性は大いにあると確信しています。そしてこのHORIBA の強みは21世紀においても人類の夢の実現に必ず貢献できると考えています。

\*ブラックジャックプロジェクト

21世紀に生き残りをかける意味で、21とカードゲームのブラックジャックで最強のカードである21をかけて業務改革プロジェクトのネーミングとしています。

# 半導体製造の効率化に寄与

**IT** 革命の進展によって携帯電話や携帯情報端末が急拡大し、半導体素子の需要は大きく伸びています。半導体メーカーは、200mm ウエハの生産から300mm ウエハによる大口径化を推し進めつつあり、最先端の300mm ウエハによる製造ラインのニーズが高まっています。グループ会社（株）エステックでは、半導体製造装置にガスを供給する重要パーツであるマスフローコントローラの開発・生産を行っており、ネットワーク化による合理的な制御を実現するデジタルマスフローメータなど各種計測・制御ユニットを取り揃えています。

一方、300mm ウエハの採用により、半導体製造プロセスの各段階における計測や分析のニーズが高まっており、HORIBA やグループ各社ではそれらのニーズに合わせた各種分析装置を提供しています。たとえば、ウェット洗浄プロセスでは、各種方式に合わせた薬液モニタのラインアップを増強し、コンバクトで高速応答の新製品を市場に投入しました。

薄膜成長プロセス向けには、最先端の全自動超薄膜計測シ

テム UT-300 をグループ会社 ジョバンイボン社（フランス）のセンサ技術を用いて製品化し、フラッシュメモリや携帯電話に用いる通信用半導体素子、高分解能の液晶表示素子等の製造ラインにおける最先端の超薄膜計測に威力を発揮しています。



**素** 材解析などの分野でも、HORIBA の X 線分析装置、ジョバンイボン社のラマン分光分析装置など数多くの研

究開発

用分析システムをラインアップしています。

**さ** らに環境計測分野の計測シーズを生かして、PFC（パラフロロコンパウンズ）モニタや排水分析用の全りん全窒素モニタ、超純水ライン用のシリカ計や溶存酸素計など幅広い分野で半導体工場の計測ニーズに対応しています。長年培ってきた環境計測技術、分光技術、X線分析技術など他社の追随を許さない独自の技術を生かして顧客のニーズに応えていくとともに、納期や品質に素早く対応していきます。



**マスフローコントローラ:** 半導体製造工程でガスの流量を精密に制御する機器。  
**ウェット洗浄プロセス:** 半導体が嫌うパーティクルと呼ばれる微細なチリを洗い流す工程。

**全自動超薄膜計測システム UT-300:** 露光時の反射防止膜などの超薄膜を高精度に測定する最新装置。

**X線分析装置:** 電子顕微鏡と組み合わせて物質の微小領域の元素分析をする装置。

**ラマン分光分析装置:** ラマン散乱光により、物質の微小領域を分析する装置。

**PFC（パラフロロコンパウンズ）濃度モニタ:** エッチング装置やCVD装置から排出されるPFCガスを多成分同時連続分析する装置。



# SEGMENT SUMMARY

## 事業別特長（連結）

マスフローコントローラ



31.7%

### 〔半導体システム機器〕

半導体製造プロセスの生産性向上・歩留まり向上や品質維持のために欠かせない薬液濃度モニタ、マスフローコントローラ、レチクル/マスク異物検査装置、超薄膜計測システムなどを主力製品としています。グループ力を生かして、半導体市場に広くビジネスを展開しています。

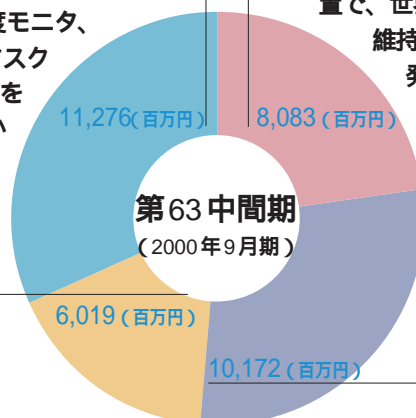
エンジン排ガス計測実験室



22.8%

### 〔エンジン計測システム機器〕

この分野の主力製品はエンジン排ガス測定装置で、世界シェアの80%と高いシェアを維持しています。新型エンジンの開発や燃料電池の開発にもガス分析を通じて貢献しています。再編の進む自動車メーカーにおいても合理化が進む研究開発の世界統一仕様製品として浸透、サービス面でもグローバル対応ができ、顧客からあつた信頼を得ています。



第63 中間期  
(2000年9月期)

16.9%

### 〔医用システム機器〕

自動血球計数装置、生化学分析装置を中心に事業を展開しています。フランスのABX社と製品を共同開発するなどシナジー効果も現

れています。売上シェアの拡大を図りながら、新しくぜん息治療薬の血中濃度測定装置を開発するなど新市場の開拓も積極的に行っています。

医用現場



28.6%

### 〔分析システム機器〕

理化学や新素材の研究用分析計、環境用・工業用の分析計など多品種の製品をこの分野では販売しています。IT（情報技術）など成長の著しい半導体や電子部品の分野にも材料分析などを通して貢献しています。今後はホリバグループが持つ技術や資源を集中させ、顧客ニーズに対応していきます。

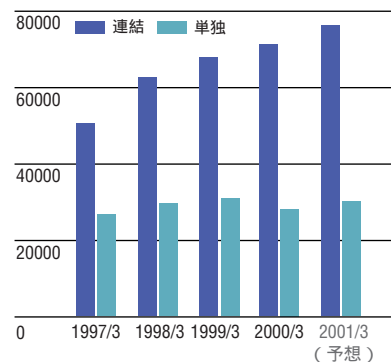


土壌測定

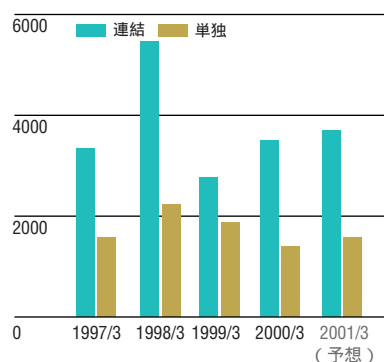
# FINANCIAL SECTION

## 数字とデータで見るホリバ

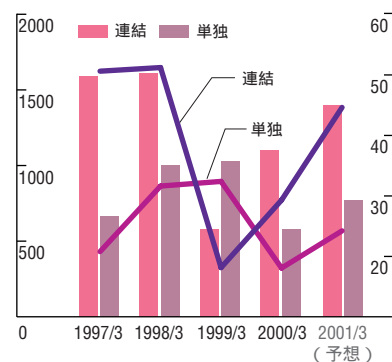
売上高(百万円)



経常利益(百万円)



当期利益(百万円) 一株当たり利益(円)



株式の状況(2000年9月20日現在)

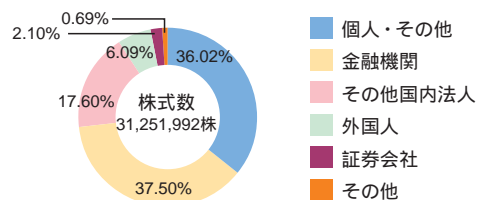
発行済株式の総数 ..... 31,251,992株  
株主数 ..... 4,378名

主な株主名(上位10位まで)	株式数	持株比率
日立製作所	4,124,175株	13.19%
堀場雅夫	2,147,790	6.87
住友信託銀行(信託口)	868,000	2.77
三菱信託銀行(信託口)	865,000	2.76
東海銀行	810,449	2.59
堀場洛楽会投資部会	724,193	2.31
第一勧業富士信託銀行(信託A口)	716,000	2.29
三和銀行	687,899	2.20
第一勧業銀行	642,549	2.05
京都銀行	591,000	1.89

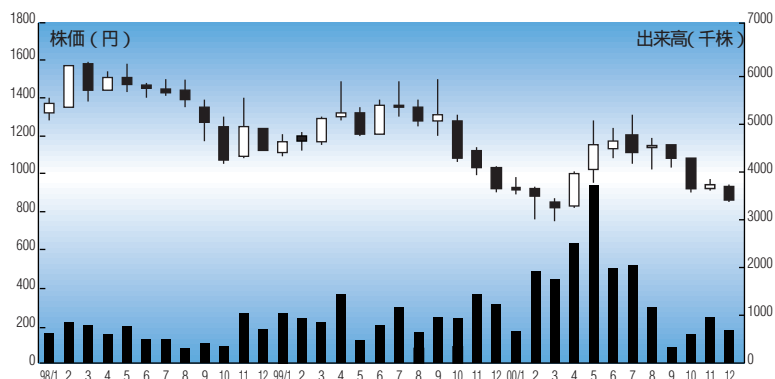
主要財務諸表

連結財務諸表	1999/3	2000/3	2001/3 予想
売上高(百万円)	67,597	71,030	76,000
営業利益(百万円)	2,914	3,817	4,400
経常利益(百万円)	2,775	3,498	3,700
当期利益(百万円)	576	1,100	1,400
一株当たり当期利益(円)	18.56	35.40	45.04
一株当たり株主資本(円)	1,235.59	1,261.04	
株主資本比率(%)	42.5	43.0	

株式所有者別状況



株価チャート



### ホリバ・コリア(韓国) 工場を移転

2000年11月、ホリバ・コリア社は手狭となっていた工場から新工場に移転しました。新工場は、従来工場の2倍のスペースとなっています。ホリバ・コリア社は、自動車排ガス分析装置などの生産を行ってきましたが、生産機種や規模が増える中で、新製品の量産化に対応するスペースの確保が難しくなり、今回の移転となったものです。新工場は、ソウル金浦国際空港から車で20分という交通の便利な富川テクノパークに位置しており、生産の拡大と売上増に寄与するものと期待されています。



### 「台湾連絡事務所」を本格稼動

台湾の半導体産業は、米国・日本に次ぐ生産量を誇り、韓国と並んでめざましい成長を続けています。ホリバグループでは、グループ会社のエステックが独自に台湾支店を設置して営業活動を展開してきましたが、堀場製作所は、現地販売代理店を通じてのみ営業活動を行ってきました。今回の台湾連絡事務所の開設は、台湾現地における取り組みを強めるもので、半導体分野の市場ニーズなど情報収集を行う一方、

お客様により密着した営業活動の展開により、売上の一層の拡大

を目指します。新オフィスは、半導体企業が集中する台北の南西、新竹サイエンスパークという好立地に位置し、エステック台湾支店と共同で運営が行われます。



### 介護・バリアフリー市場で「人体センサ付電源リモコン - ついちゃうもん - 」が注目

コンシューマ向け商品展開の第一弾として、「人体センサ付電源リモコン」を発売しました。分析計で培ったセンサ技術を応用し、家庭用の電気製品(照明など)のプラグとコンセントの間に本体を接続するだけで、リモコン側

のセンサが人を感知して電気製品を自動でオン/オフさせる便利なグッズです。本製品は多くの反響を呼び、省エネ・介護・バリアフリーを研究される有識者からも注目されています。